

氏名	竹島克典
学位の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	乙文第132号（文部科学省への報告番号乙第370号）
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2016年2月26日
学位論文題目	対人・行動的アプローチを基盤とした児童期の抑うつに関する心理学的研究
論文審査委員	（主査）教授 松見淳子 （副査）教授 桂田恵美子 中尾繁樹（関西国際大学教育学部教育福祉学科教授）

論文内容の要旨

竹島克典氏の博士論文は、対人・行動的アプローチを基盤とした児童期の抑うつに関するアセスメントと介入研究の成果をまとめたものである。子どもの抑うつ症状には、抑うつ気分だけではなく興味や楽しみの減退、イライラした気分、食欲・体重の変化、睡眠の問題、自責感、自殺念慮などの多様な症状が含まれる。日本の一般児童生徒を対象とした実態調査からは、約10-20%の子どもが臨床的に有意な抑うつ症状を示すことが明らかになってきており（傳田他、2004）、抑うつ症状と不登校や学業不振、対人関係を含む適応上の問題との関連が示されている。本博士論文研究の目的は、対人・行動的アプローチを基盤として、抑うつ症状を示す児童と仲間との社会的相互作用の関連を検討し、アセスメント研究に基づいて介入計画を構築することである。対人・行動的アプローチでは、抑うつを社会的文脈の中でとらえ、個人と環境の社会的相互作用を機能的に検討することで抑うつの発生や維持、悪化に至るプロセスの解明を図る。

博士論文は全4章から成る。第1章では児童期の抑うつの対人・行動的アプローチの基盤を文献レビューにより固め、博士論文研究の目的を明らかにしている。第2章と第3章では5つの実証的研究を報告している。研究は全て小学校において実施され、児童の抑うつの査定には日本で信頼性と妥当性が示された Birlerson (1981) の子供用抑うつ自己評価尺度（Depression Self-Rating Scale for Children: DSRS）の日本語版（村田他、1996）を用いている。

第2章では3つのアセスメント研究を展開している。研究1では小学6年生108名を対象に調査を実施した結果、児童の抑うつはソシオメトリック評定による仲間からの人気度と親しい友人数との間に負の相関関係があることが示された。特に DSRS で臨床基準値を超える抑うつ症状を示した児童は、そうではない児童と比べて、親しい友人が有意に少ないことが明らかになり、抑うつを示す児童が社会的に孤立しやすいことが示された。

研究2では抑うつを示す児童と仲間との社会的相互作用を行動観察法によって検討し、対人行動の特徴と相互作用プロセスを明らかにしている。対象児は小学5、6年生60名の児童であった。抑うつを示す児童1名と他の児童2名による3人構成のグループ（抑うつ群10組）と抑うつを示す児童が含まれない児童3名によるグループ（低抑うつ群10組）ごとに問題解決場面を設け、行動観察を行っている。結果、抑うつを示す児童は、グループ内で孤立・引っ込み思案行動が多く、向社会的行動が有意に少ないことが示された。ビデオに録画された児童の相互作用の行動コーディングに基づく逐次分析（Bakeman & Gottman, 1997）の結果、

抑うつを示す児童の孤立・引込み思案行動は、本人を除く仲間同士が会話をしている場合に起こりやすく、仲間からの批判や拒否といった攻撃的な行動が有意に起こりにくくなるという機能的関係が示された。行動連鎖の分析結果は、抑うつに対する対人・行動的アプローチに基づく予測と一致するものであった。すなわち、抑うつを示す児童は、正の社会的強化を受けにくい環境を維持していることが示唆された。

研究3は子どもの抑うつに対してリスク要因となる対人関係要因を検討するために実施された9か月の前方向視的研究である。抑うつ症状と対人関係要因（家庭ストレス、友人ストレス、コーピング、ソーシャルサポート、仲間関係）の関連を小学4年生の児童108名を対象に行った研究の結果、抑うつ得点が高い子どもは9か月後も抑うつ得点が高いこと、さらに対人ストレスとコーピングの相互作用が抑うつ調整要因として機能することが示された。

第3章、研究4と研究5では児童の抑うつに対して学級の対人社会的環境に働きかける介入研究を行い、その効果を検討している。児童がお互いの「良い行動」に着目することを奨励する「仲間による肯定的報告法」(Positive Peer Reporting; PPR)を担任教師が学級活動として継続的に実施することを援助し、PPR介入による児童の抑うつ症状の低減効果を検討している。研究4ではPPRと学級単位の集団随伴性を組み合わせた介入パッケージを作成し、小学5年生33名を対象に実施した結果、児童の抑うつ症状の低減と仲間関係の部分的な促進が示された。研究5ではPPR単独の介入によって抑うつが低減したことから、学級単位の集団随伴性の付加的効果は限定的であることが分かった。介入を実施した教師からは、プログラムは受け入れやすいものであると評価され、社会的妥当性が示された。抑うつを示す児童も参加によりカードへの記入と提出が徐々に増加したことで介入の初期目的は達成されたことを報告している。

第4章では総合論議を展開しており、博士論文研究の成果と貢献、限界および今後の研究課題について考察している。博士論文研究を通して、児童の抑うつを対人的文脈の中で理解し、効果的な支援方法を確立するために、対人・行動的アプローチに基づく視点の有効性を強調し、博士論文を結んでいる。

論文審査結果の要旨

竹島克典氏の博士学位申請論文「対人・行動的アプローチを基盤とした児童期の抑うつに関する心理学的研究」は、長期に亘る系統的な実証的研究をまとめたものである。子どもの抑うつ問題が、適応上の深刻な問題として認識されるようになり、その発生機序や維持のプロセス、効果的な支援方法についての実証的な解明が求められている。日本では子どもの抑うつの実態や支援方法に関する研究はまだ始まったばかりである。本博士論文研究の目的は児童期の抑うつと児童の対人的文脈に焦点をあて、児童と環境との社会的相互作用について機能的にアセスメントを行い、その結果に基づいて支援方法の構築を図ることである。

博士論文は全4章から成る。第1章では児童期の抑うつに対する対人・行動的アプローチの基盤を内外の文献レビューにより固め、実証的に検討すべき課題を論じ、博士論文研究の目的を明らかにしている。第2章と第3章では5つの実証的研究を展開している。それらはアセスメント研究（研究1、2、3）と介入研究（研究4、5）に分けられる。具体的には抑うつを示す児童と仲間関係との関連を明らかにする研究（研究1）、社会的相互作用における抑うつ的言動の機能を明らかにする機能的アセスメント研究（研究2）、抑うつを示す児童の対人関係と対人ストレスに焦点を当てた9か月の前方向視的研究（研究3）、抑うつ症状の低減を目標にした「仲間による肯定的報告法」(positive peer reporting: PPR)を用いた学級規模の介入研究（研究4）、およびPPR介入プログラムの要素分析研究（研究5）を指す。総合的にアセスメントから介入に至る抑うつ研究プログラムを構成している。

対人・行動的アプローチを基盤とした抑うつ研究は、個人への認知的アプローチを基盤とした抑うつ研究とは理論的にも方法論的にも大きく分岐するものであり、近年文献においても刺激的な論議が展開され

ている (Platt et al., 2013)。竹島氏の研究は子どもの生活教育場面に入り込み、直接行動観察法により抑うつ関連行動の前後関係を時系列的に丹念に調べていることが一つの大きな特徴であり、その研究手腕は際立っている。さらに9か月に亘る前方向視的研究により、抑うつを示す子どもの自己報告による対人ストレスとコーピングの相互作用を検討し、抑うつ症状の長期的持続過程に関わる対人環境要因が示唆された。研究4と研究5は学級全体を対象にした実践研究である。児童がお互いの「良い行動」を認め合えるような学級環境作りを推進するため、教師が主導で「仲間による肯定的報告法」(PPR)を実施している。口頭試問では学級で抑うつ症状を示す児童の事例検討を行うことの有効性が指摘されたが、将来的には研究4と研究5はすべての児童が継続的に参加するユニバーサルな抑うつ予防研究の糸口にもなる。

口頭試問は子どもを取り巻く近年の社会情勢下、本博士論文研究成果の社会的還元性が極めて大きいことを反映する内容となり、対人・行動的アプローチの理論的妥当性を裏付ける博士論文が評価された。今後PPRによる学級介入研究では、抑うつに限定したアセスメントに留まることなく、幅広く児童の学校適応のアセスメントを行うことも推奨された。児童期の抑うつについて未解決の問題が非常にたくさんあることも明らかとなった。竹島氏が首尾一貫して対人・行動的アプローチに基づく行動的な実証的研究を、子どもの日常生活の現場で推進する姿勢を貫いていることも注目に値する。総じて、竹島氏の研鑽された科学者実践家としての確かな力量が博士論文と口頭試問で示された。

竹島克典氏は2016年1月29日に本学F号館において博士論文の公開発表を行った。審査委員会は、本博士学位申請論文を慎重に審査し、また2016年2月8日にハミル館で実施した口頭試問における結果と学会や教育あるいは発達支援の現場などにおける諸活動から判断し、竹島克典氏が博士(心理学)の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達したのでここに報告する。